

らに、里親に対してサポートをする、支援をするという側面がこのソーシャルワーカーに求められているものとして強調されているかと思います。また、そのソーシャルワーカーの人たちが、専門家のチームの一員となるようにしています。また、そういった里親たちが、子育ての技術、養育の技術を学べるような研修も行います。また、子どもと里親が、実際に恋に落ちると言いますか、お互いがお互いを愛せるような、そういうことができるようにするためにアタッチメント理論に基づくアプローチをとる場合もあります。また、そのほかの里親の専門家ですと、社会学習や行動理論のアプローチを活用すると述べている人もいます。つまり、皆さんが、里親に関する文献を読まれますと、このようにいろいろな違ったことが書かれています。ですが、これは残念なことに、何もかもがどういったケースにも当てはまるとは言えないわけです。それぞれのアプローチとかやり方というもの、それぞれ異なるものが、それぞれの里親のケースに当てはまっていくのが実情です。

◆治療里親について

治療里親についての話をしてほしいとご依頼がありましたので、そのあるモデルというのがあります。それがアメリカを発祥としたモデルなのですが、イギリス、オーストラリア、ひょっとして日本でも使われているかもしれません。多次元的治疗里親、MTFCというのがありますので、そのお話をします。これは、実際にマニュアル化されたプログラムでして、そのマニュアルに沿って何をすればいいのか書いてあり、行うものです。実際に、この養護者となる里親の方々はこの目的のためだけに、開拓され、雇用される人たちで、研修もきちんと受けて、そして多額の報酬を受けます。この養護の目的ですけれども、実際には、ずっと長期間にわたるといえるものではなくて、6か月から、長くても12か月くらいまでの期間と考えられているプログラムで、このプログラム終了後は、元の家族の元に子どもは返されるというのが基本的な考え方です。その家族に対応する専門家の専門職チームというのが付きます。これが、24時間体制で支援を行います。その家族と子ども、それぞれ個別にまたはグループで、社会学習理論のアプローチをとりながら対処をしていくというものです。これはとても深刻な問題を抱えた子ども向けのプログラムでして、実際には、とても若い子どものグループも含めて行われていたりします。ただ、イギリスでこれをやってみてちょっと難しいと感じたところなのですが、多くの子どもたちがすでに里親の養護を受けていて、そしてその中で問題が出てきているというところなのです。すでに存在している里親家族を助けたいということでやっているの、なかなか、そういう子どもたちに対処するのができないので、これは実際に実践するのは難しいとってしまいます。

多次元的治疗里親 (MTFC)

オレゴン・ソーシャル・ラーニング・センター (OSLC)
スライド20

- 複雑なニーズ(6～9ヶ月継続)のある子どものための組織されたチームによる短期集中プログラム
- チームメンバーが熟練した養育者のため、サービスの運営に高額の費用がかかる
- 専門職チーム(主な専門職はソーシャルワーカーでなく心理職)が、24時間体制で支援を集中的に行う

(続く)

スライド 20-2

- 社会学習理論的アプローチ
対個人とグループ
- イギリスで4つの試験的プログラムが始まった
3~6歳児、5~12歳児、13~16歳児、
非行少年グループ

KEEP 養育里親、親族里親に応用

スライド21

- MTFCは、実親と里親委託が不調になった施設ケアにいる子どもを支援するには、最も適したプログラムである
- 里親と親族を支援し、訓練すること
- 根拠に基づくプログラム(MTFCを適用)は里親・親族養護の子どもを養育環境の安定と行動的・情緒的成長を保障する(MTFC終了後の委託があるいは委託中)
- 5歳から12歳までの子どもが対象
- 16週間のグループワーク

すでに里親家族を助けるためのプログラムとして、もう一つ別のものがある、それが、キープと呼ばれているプログラムです。これは、グループワークを中心にしたものです。これについては、ぜひ、目を通しておいてください。治療里親というのは現在評価されておりまして、評価されているのは、とても深刻な問題を抱えている難しい子どもに対して、期間限定的に対応するために使われるのであれば効果があるだろう、可能性があるだろう、とは言われています。ですが、その費用面でかなり高くなってしまいます。お金はもちろんですし、専門家の時間もかかりますので。そして、こういったプログラムを取る子どもたちも、このプログラム終了後には、その後、帰れるところ、帰って自分を愛してくれる人のいるところがなくてはなりません。ですので、その治療チームという人たちは、実際に子どもがプログラムを受けて帰ってくる前に、その家族ともやり取りをして、そういう土壌を作っておかなければいけないし、子どもがプログラム終了後、家に帰った後も、そういった点では、付き合い続けなければなりません。ですが、皆さん、日本の場合にこれを使うことを考えるとして、例えば、年齢が上の方の子どもたちで、問題行動をとる子どもたちに、この治療里親という方法を考えると、役に立つかもしれません。

こちらに、参考文献を出しております。真ん中から下のあたりに色の違うところで、WebサイトのURLが書いてありますが、ここを見ただけですと、詳細な内容が分かりますし、またその下の参考文献では、大体の目安としてどれくらいの費用がかかるかなどについても書かれています。

こういった里親の中には、子どもに問題があって、とても困っているけれども、一生懸命育て続けよう、面倒見続けようとかがんばっているところがたくさんあると思います。そういったところで、このキープなどの治療里親の制度をもし使えらしたら、今困って固まってしまっている負の状態を打ち破ることが、何かできるかもしれません。この、代替的なアプローチを考えたときに、すでに養子として、家族の一員となっている子どもであるとか里親家族に引き取られている子どもに関しては、そういったアタッチメント論理に基づくアプローチで、その代替アプローチをとることは有効かもしれません。実際このアプローチなのですけれどもイースタングリア大学の私の同僚が、リサーチをベースにして、その長期的な里親養護についての研究をしまして、それに基づいて作り上げたものなのですが、ウェブサイトにも出ておりますけれども、イタリア語やスペイン語などにも翻訳されておりまして、いろいろと関心を持てるような面白いことが書かれているものです。まずこの真ん中にあるのが子どもです。安全な基地が必要です。長期的に情緒面で、ずっとその子どもを支えていくためには、やはり、何をするにしても、この安全が保障されている基地が必要です。そういったものをベースとして、子どもたちはいつもその里親という人が

治療里親の評価

スライド 22

- 多角的治療里親は；
- 期間限定の対応には有効である
- 問題行動のある若者には適している

しかしながら、

- 費用がかかる一お金と専門家の時間
- すでに里親ケアにあり、情緒的問題を抱える子どもには効果が認められていない
- 子ども・青少年には「帰る家」が必要であり、彼らを愛し、喜んで養ってくれる親も必要

治療里親の文献

スライド 23

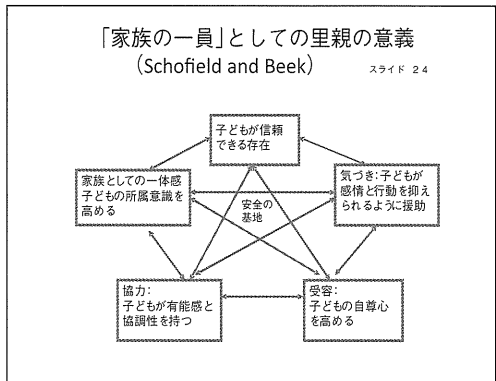
Blehal, N. (2009) 'Treatment Foster Care' In Schofield, G. and Simmonds, J. (2009) Child Placement Handbook (Jessica Kingsley)

Chamberlain, P., Price, J., Leve, L.D., Laurent, H., Landsverk, J.A., & Reid, J.B. (2008). Prevention of behaviour problems for children in foster care: outcomes and mediation effects. *Prevention Science*, 9, 17-27.

Price, J.M., Chamberlain, P., Landsverk, J., Reid, J., Leve, L., & Laurent, H. (2008). Effects of a foster parent training intervention on placement changes of children in foster care. *Child Maltreatment*, 13, 64-75.

MTFCE National Evaluation Team (2010) *Multi-dimensional treatment foster care in England: Annual Progress Report*
<http://www.mtfce.org.uk/reports/MTFCE%206th%20Annual%20Progress%20Report%202010%20Final2.pdf>

Holmes, L., Westlake, D. and Ward, H. (2008) *Calculating and Comparing the Costs of Multidimensional Treatment Foster Care, England (MTFCE): Report to the Department for Children, Schools and Families. Loughborough: Centre for Child and Family Research, Loughborough University.*



側にいてくれるのだという、そういう存在がある、ということを感じられます。そして、その人たちを信頼できるようになります。そして、その子どもと里親というのが一つの家族であるという感覚を共有することができます。そういうことは、とても重要ですので、例えば、ソーシャルワーカーやそのほかの人たちがいきなり来て、そのせっかく作り上げた関係から、子どもを急に奪ってしまうことがあってはならないわけです。また、そういったソーシャルワーカーの人たちは、里親が十分な感受性をもって気づいてあげられるようにすることが必要です。また里親は、その子どもをありのまま受け入れることが必要です。自分が望む子どもで、こうあるべき姿というのではなく、そのありのままの姿です。完璧な子どもを望んではいけません。例えば、子どもが学校での成績に悩むのであれば、それはそれでそのままの子どもを受け入れてあげなければいけません。そして、ほかの人たちとの協調性を子どもが身につけるようにしなければなりませんし、その相手は誰かということ、同じ子ども同士でもそうですし、ほかの大人との関係でもそうですし、治療のチームのメンバーの人たちともうまくやっていけるような協調性ということです。例えば、里親に対して、いろいろな人とうまくやり取りできないような、こういう人とは顔を見たくないよとか、そういうことを子どもが言うことがあります。そんなことがないように援助が大切です。そして、家族としての一体感というのがあります。子どもが本当にその家族に所属しているんだという気持ちを持つてるといいうことです。これは、通常の家族であっても、そうでない家族であっても、特に違いはないかもしれません。

◆成功する里親

皆さまが、実際に里親になりたいという方を募集するとき、どういう特徴が成功する里親の特徴としてあるかを、最後にお話をしていきたいと思えます。もちろん、まず子どもが好きであるということが第一条件です。もちろんだとは思いますが、たまにそうでないような人もいます。それから、家庭中心というのは、家族全体で何かを一緒にすることを楽しんでやるところ。それから、これ、先ほども申し上げましたけれども、里親になるのもいろいろな課題もついて回ります。そういう課題を克服していかなければいけません。そういう挑戦的なことでも、それを楽しんでできるような人です。あと、里親となっていくためには、新しい命をそこに受け入れるわけなので、家族だけで孤立してしまうような、そこで閉じてしまうような関係をつくる人たちは、あまりふさわしくないと思えます。すでに申し上げましたけれども、子どものニーズには敏感でなければいけません。よく、うちはどの子にも同じように接してますよと言うことがあるのですが、そうじゃなくって、もちろん、平等であることは大事だと思いますが、それぞれの子どものニーズに合わせて、違うように接することは大事だと思います。そしてまた、里親としてその子どもを産んでくれた生みの親について関心を持つ、共感を持てるといいう人たちが大事だと思います。それは、つまり、子どもを虐待した人であるとか、なんか精神的な病を抱えている人であるとか、ドラッグやギャンブルをやる人、そういった人たちに共感できるかどうかということです。例えば、性的虐待を子どもにするような人たちもいます。そういった場合には、非常に敏感な問題がありますので、そういった親から生まれた子どもと話をするとき、そういったところを十分に理解して、共感した上で子どもと話をしなければならなくなりますから。それから、子どもを育てていくには、いろいろなことが必要となってきます。それは、教育であるとか、そ

成功する里親の特徴

スライド25

- 子どもといることを楽しむ・家庭中心
- 変化を好む
- 子どものニーズに敏感
- ありのままの子どもを受け入れられる
- 子どもと実親との関係に理解があり、協力的。実親に共感できる
- 教育・活動・生活技術を教えるのに積極的

のほかの活動、そういったところでの子どものニーズを満たすことに積極的に取り組んでくれるような人です。これも冒頭で話したところに戻りますけれども、とても重要なポイントです。

◆おわりに

日本でこういう里親養護が必要である子どもはどのような子どもであるのか。それを示すようなよりよいデータが必要になります。日本を出している統計結果はとてもいいものだと思います。フランスやドイツやイタリアのデータに比べると大変よろしいと思います。ですが、皆さんが、本当にそういった統計調査結果を使ってしかるべき形でちゃんと使えているかどうかというのは、私は分かりません。というのは、日本なら日本の政策がどういうふうになっているか、そういう背景の中で使っていかなければならないからです。もしかしたら、分野的には、いくつかのところで追加的なリサーチ調査が必要になるところもあるかもしれません。そういうところが分かって初めて、どういう子どもたちが里親養護を必要としていて、何人里親が必要となって、そういった里親がどういったタイプの人たちが必要であって、どのようなトレーニングがその人たちに必要になるかということに分かって、初めて考えられるようになるからです。そこで、今度は外国に目を向けて、では、こういう日本の政策がある中で、どういうほかの国で実践されていることが、私たちの助けとなるだろうかを考えてみたらいいのではないのでしょうか。その国も単数ではなくて、複数の国に目を向けることも必要かもしれません。例えば、ドイツとかスカンジナビア、実は私もすでに調査していますけれど、ああいった国には、すでにたくさん養護施設があります。皆さんの日本には、たくさん養護施設がすでにあります。最後のところなのですが、これは、ぜひ、先ほど、通訳と打ち合わせをしたときに説明したので、説明を日本語でもらえればと思うのですが、そのほかの国のいろいろな政策や実践を見ていったときに皆さんが、それを、そのまま持ってきて、日本に当てはめるといことはぜひ避けたいと思います。

これが参考文献のリストです。以上です。どうも、ご清聴ありがとうございました。

成功する里親の特徴

スライド26

- 子どもといることを楽しむ・家庭中心
- 変化を好む
- 子どものニーズに敏感
- ありのままの子どもを受け入れられる
- 子どもと実親との関係に理解があり、協力的。実親に共感できる
- 教育・活動・生活技術を教えるのに積極的

最近の参考文献

スライド27

- Sinclair, I (2007) Foster care now: Messages from Research
- Schofield, G, and Simmonds, J. (2009) Child Placement Handbook (Jessica Kingsley)
- Schofield, G and Beek, M. The 'Attachment handbook for foster care and adoption'
- Fernandez, E and Barth, R. (2010) How does foster care work? (Jessica Kingsley) (特に推薦)
- Courtney, M, and Thoburn, J. (2011) 'A Guide through the knowledge base on children in out-of-home care' *Journal of Children's Services*, 6, 4 (accepted for publication Dec 2011)
- Thoburn, J. (2010) 'Achieving safety, stability and belonging for children in out-of-home care. The search for 'what works' across national boundaries' *International Journal of Child and Family Welfare* Vol 12, Number 1-2 pp 34-48
- Dickens, J, et al (2007) 'Children starting to be looked after by local authorities' *British J. of Social Work*, 37: 597-617.



2011/11/4 ソブン先生とプロジェクトメンバー

厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）

研究課題名：社会的養護における児童の特性別標準的ケアパッケージ
「被虐待児を養育する里親家庭の民間の治療支援機関の研究」

平成23年度 総括・分担研究報告書

発行日 平成24（2012）年3月
発行者 研究代表者 開原 久代
発行所 東京成徳大学 子ども学部
〒114-0033 東京都北区十条台1-7-13
Tel：03-3908-4530 FAX：03-3907-6195
印刷 大日本印刷

